

■平成15年度在京飯田高校同窓会記念講演

## NGO 国際協力活動とボランティア、そして教育 シヤプラインール30年の活動から

福澤郁文 (高18回)

### 人生をマイナスに賭ける

「どんな本に影響を受けたのですか？」

ある日、友人の編集者から電話が入った。そのとき思い浮かんだのは岡本太郎の「美の呪力」だった。書棚から取り出してページを繰ると、当時開催された「TAR O展」のチケットが出てきた。その裏面には、僕の若い頃の字でこんなことが書いてあった。

——日本橋に校正のため出かけた。TAR O展のボスターが目にとまり会場に足を踏み入れた。真赤に燃えて躍動する空間。不規則に、はちきれんばかりに血を送り出している心臓のなかに入ったような感じだ。彼の絵からは根源的で魔のような神秘の力が湧き出ている。水たまりのような日本をとり出してデザインではないもの、それが今、欲しい！——

岡本太郎には、僕が芸術とか美とか表現という行為に對して持っていた固定観念をぶち破られた。「芸術は怒りであり、人間存在をかけた行為なんだ」と。じつと耐えて笑いながらも腹の底はグラグラと怒りがたぎっている。ヘラヘラ笑って楽しいだけでは何も変わらない。

「人生の岐路、あれかこれかという分かれ道に立たされた時、一方は安全な道、片方は行ったら危ないマイナスの道だ。死ぬかもしれない。そうしたら必ず危険な方、真暗闇の死の道に飛び込む」というのが岡本太郎の言葉だ。

僕が美術大学に通っていた頃は、大学紛争が長く続いていた。その後、卒業してデザイン会社に就職してからも、その先の展望が見えず、悶々とした毎日を送っていたように思う。会社勤めも一年も続けることができなかつた。

「パンクラデシユ農業復興奉仕団」の一員として、僕

が独立直後のバングラデシユへ飛び立ったのは、T A R  
O 展から二か月後の一九七二年四月であった。

小さい頃から天龍川で遊んだり、春にはワラビ採り、  
秋にはキノコ狩りと、山を這いずり回るのが好きだった。  
あの中央アルプスと南アルプスに挟まれた、楕円のような  
な空の下に育った僕が、三六〇度、見渡す限り地平線の  
バングラデシユの大地の上に立っていた。

## バングラデシユの村で

何も想像できない恐怖と不安はあるものの、それは一  
方でワクワクするような決断でもあった。大学の民主化  
闘争で一種の敗北感に囚われていた僕は、建国の意気あ  
がるバングラデシユを体験したいと思った。それは「時  
代」を感じる瞬間でもあるはずだ。「国家が独立を勝ち  
得たということはどんなことなのか、この目で確かめて  
みたかった」のだ。

バングラデシユで奉仕団として働いた四か月は、あっ  
という間に過ぎていった。

雄大な田園風景、劇的に変化する雨雲、人間が人間ら  
しく生きる姿にすっかり魅せられてしまった。それは自  
分のなかの何かが弾けるような体験であった。

しかし、一方で僕たちが現地を目にしたのは矛盾に満

ちた援助の姿だった。援助で潤っているのはごく一部の  
豊かな人々であり、国民の大多数を占める貧しい人た  
ちにとっては、援助はまったく無縁のものだったのだ。  
日本人がボランティアとして働く姿も、他にほとんど見  
ることはなかった。

二か月も経つと、バングラデシユの村の生活にも慣れ、  
たとえどしくもベンガル語を話すことが面白くなってき  
た。朝からの仕事を終え、昼休みをとりて近くの学校に  
行った。その校舎の片隅に、真夏の強い日射しを避け、  
黒いコウモリ傘で身を隠すように座り込んだ母子の姿が  
あった。五、六歳と思われる子どもは、腰に一本のヒモを  
くくり付けただけの姿で石ころを転がせて遊んでいた。

「パッチャ、コトジョンアセ……」

仲間のバングラデシユの青年の助けを借りながら弱々  
しいベンガル語を聞くうちに、この母子は戦火を逃れて  
インドの国境を越え、やつとの思いでバングラデシユに  
戻ってきた難民だということが判った。独立戦争で夫を  
失い、家も焼かれてしまっていた。子どもの一人は病氣  
で死に、長男は街の食堂で皿洗いをし、いま連れている  
子どもは三男だということだった。

子どもの足を指で押してみると、指のかたちが残った  
まま元にもどらない。栄養失調のようだ。疲れた表情の

母親はかなり老けてみえたが、僕と同じ二十三歳だと知らされ、息を呑んだ。僕はそれ以上質問することができなくなった。

村で暮らすうちに、貧困というものが長い過程を経て生み出されてきていること、社会の構造のなかで村の農民らがどんなにもがいても、そこから逃れることができない図式になっていることに段々気づき始めた。

バン格拉デシユの独立戦争も、イギリスからの植民地支配の時代から、インドの独立と東西パキスタンとの分離、その後の西パキスタンによる政治的、文化的支配に對する民族的自立を求めた長い闘争のなかで起きた。バン格拉デシユ人は独立を勝ちとったものの、少数民族や農民たちに多くの悲劇が引き起こされた。

それまで、もっと悲惨で目を背けたくなるような場面も多く眼にしていたはずなのに、なぜあの時、あの母子の姿に、喉が苦しくなるほど悲しく、そして悔しかったのかと、いま思う。

表面的には穏やかに見える農村のなかでも、打ち拉がれてじっと耐えている人の存在が見えてくると、自分が何もできない、あまりにもちっぽけな存在に思えてくる。

援助活動のボランティアとしてこの国に来たのに……、次第に無力感にさいなまれるようになっていった。

バン格拉デシユが、あなたたちに  
幸福をもたらすように

身体のかなからこみあげてくるような、言葉にならない思いを抱いてバン格拉デシユから帰国した僕たちは、内にある何もものに衝き動かされるようにして、バン格拉デシユでの体験を語り続けていた。それは自らに問いかけ、他者に語りかけることによって改めて、自分自身を確かめていくような行為でもあった。「この体験を意味あるものにしなければ、とにかく行動を起こしていこう……」という思いだけがあった。

日曜日ごとに新宿の歩行者天国に繰り出して、バン格拉デシユの人々の写真パネルを並べ、ベンガルでの体験を路面にチョークで書き綴った。人垣から救援カンパが投げられ、反響の大きさに自分自身が踊らされているようでもあった。しかし、日本での救援復興への活動を二年、三年と継続していくうちに、かつてベンガルの農村で感じた苦しみ以上の、やりきれなさが再び湧き起こってきた。

「なぜバン格拉デシユにこだわるのか……」

「新しい仕事も決めたし、結婚もした。僕にはやりた  
い夢が他にいっぱいあるのに……」

この間に立ち向かえば向かうほど、僕自身の心は揺れ動き、混乱した。

「不幸な境遇のなかにあるバングラデシュの友人たちを思えばこそ……」

「海外協力は国の仕事だといって政府に任せるのではなく、市民レベルでも行うべきだ」

「貧困の問題を自分の問題として考える意識変革なのだ」  
どう言ってみても仕事で疲れた身体を、毎週のミーティングに、ジュート手工芸品の販売に、募金活動にと運んでいくには限界が見えていた。しかし、誰かがやらなくは何も解決しないだろうし、止めてしまうのは自分の敗北になることも分かっているつもりだった。仲間も一人、二人と少なくなっていた。



会場で講演をする筆者

「バングラデシュが、あなたたちに幸福をもたらすように」  
これはシャブラニールの活動を始めて間もない頃、来日したフランスの文学者、アンドレ・マルローが僕たちに贈ってくれた言葉で

ある。しかし、当時の僕には、それがどういう意味をもってくるのか、よく理解できなかった。

### むしろ変えたいと思っているのは 私たちの社会である

私たちが意識するしないに関わらず、世界には環境破壊、人口の増加、飢えや貧困、民族の対立など、さまざまな問題がある。こうした問題はなぜ起きてくるのか。私たち日本人の生活とどんな関係があり、これらの問題にどう立ち向かったらよいのか……。いまや地球上のすべての民族の営みは有機体のごとく密接にからみあっており、「助け合う」ことなくして、誰ひとり生きていけないのである。

ODA（政府開発援助）が金額の上では世界第二位の日本ではあるが、海外協力・開発援助の実態については、私たちはどのくらい認識しているのだろうか。日本では「開発援助」といえば、西欧的工業化もしくは経済開発への援助を意味することが多い。しかし、これからの時代、「開発」とは何を意味するのだろうか。

シャブラニールがNGO（民間海外協力団体）として、海外協力のあり方に一石を投じてきたのも、南北問題や日本の開発援助について考えてもらいたいことが多くあ

るからである。

シャブラニールは、市民による海外協力の会として、会員の一人ひとりが活動に参加し、組織を支えている市民の活動である。何人かのメンバーが毎年バングラデシユの農村を訪問する。一方でバングラデシユ人のスタッフが日本各地を巡回し、開発の現場からの声を伝えてくれる。相互が理解を深め合い、共に開発問題を考えている。

シャブラニールの活動は現地の農民たちの自発性を尊重しながら、地域住民全体の発展や開発に取り組み活動である。交流を重ねながら、地を這うように歩んできた三十年であったと思う。活動の継続すら危ぶまれるような危機を迎えたことも何度かあった。

シャブラニールのように実際に現場に立って、農民たちの視点から日本社会を見ると、グローバルズムに対する日本人の意識や、地域の発展の在り方とか、未来に向けて私たちの生活に対する示唆を与えられ、考えさせられることもまた多い。私たちはいま何を考え、どのような生活を求め、未来にどんなイメージを持っているのだろうか。私たちはバングラデシユを変えてやろうと思っっているのではないし、政府の肩代わりをしているのではない。むしろ変えたいと思っっているのは私たちの社会であり、日本の国際社会における関係のあり方である。それは、

磨げられている人々に対する意識ともいえる。その意識を激しく揺さぶる活動でありたいと考えている。

#### ●シャブラニールとは

シャブラニールは1972年設立の民間海外協力団体（NGO）で、平和で公正かつ多様な地域社会の実現を目指して活動しています。バングラデシユとネパールで貧困層の人々約7万人の生活向上を支援し、国内では現地の事情を伝え、海外協力への理解を得るための活動を行っています。また現地の女性たちが生活向上のために作った手工芸品を輸入販売し文化の紹介に努めています。こうした活動に対して、これまでに吉川英治文化賞、東京弁護士会人権賞、外務大臣特別表彰、毎日国際交流賞が授与されました。



#### ●ふくざわ・いくみ

1947年豊丘村生まれ。飯田高校プラスバンド部所属。武蔵野美術大学。「バングラデシユ復興農業奉仕団」で同地へ渡った後、ヘルプ・バングラデシユ・コミティを設立し、現在のシャブラニールまで活動を続けている。

87〜95年まで初代代表を務める。アジア、アフリカのNGOの開発の現場を歩き、人々との出会いの中で地球市民を意識する。アートディレクターとして、国際理解に関する企画ワークショップ、シャブラニールやDEAR（開発教育協会）などNGOから教育の改革に目を向けて活動中。桑沢デザイン研究所、日本工学院専門学校講師。

## 平成 15 年度在京飯田高校同窓会記念講演の内容

### NGO= 国際協力活動とボランティア、そして教育 シャブラニール 30 年の活動から



#### 1. NGO とは何か、いつ頃から始まりどんな活動をしているのか

- ・市民の自主的組織として発足した NGO (Non Governmental Organization)
- ・「地球市民」という意識を持った市民の海外協力活動はなぜ起きてきたのか
- ・1970 年代 1980 年代 1990 年代 21 世紀はどうなる？



#### 2. NGO 活動にはどんなものがあるのか、また ODA (Official Development Assistance) はなぜ問題になるのか

- ・国際協力型 現地プロジェクトの開発、緊急支援、技術協力、地球開発など
- ・国内活動型 国内問題、難民、女性、外国人労働者、環境問題など
- ・情報提供型 国際理解教育、アドボカシー、人種、ジェンダーなど
- ・ODA 援助のあり方 ODA 大綱の目指す方向



#### 3. なぜ海外協力、NGO の活動を始めたのか

- ・大衆民主化闘争、デザイン、バングラデシュ独立戦争、市民活動へ
- ・VIDEO「青春とバングラデシュ」(NHK アーカイブスより)



#### 4. シャブラニールの体験から生まれた方法論

- ・教育の重要性 異質性よりは同一性を感じる文化
- ・救援復興や慈善福祉ではなく「開発協力」。そして「共生の時代」へ
- ・土地なし貧農が対象者、主役はバングラデシュ人、ネパール人、子どもたち
- ・シャブラニールの方法論 ショミティによる教育・収入向上・保健衛生など
- ・地域開発へのアプローチと組織化 現地 NPO の独立、自立への道
- ・日本社会への展開 NPO などの第三セクターの成長をめざせ

#### 5. 教育の変革と、NGO のネットワークはどのように進められるか

- ・持続可能な開発のための教育の 10 年
- ・国際理解教育、地球市民教育、開発教育などの試みと参加型の気づき
- ・情報とネットワーク、NGO や NPO との協力からの地域でつくる教育へ
- ・ボランティアな心、感動から体験へ、未来をイメージして活動する市民に
- ・コミュニケーション+コミュニケーション=新しい地域づくりへ
- ・21 世紀、私たちのビジョンは。私たちの生活はこのまま続いているのか